当世噺家気質
三遊亭遊馬と「味噌蔵」

見た目も芸も、スケールの大きな噺家である。
　背筋を伸ばせば、ただでさえ大きな体がさらに縦へと伸びて行く。どんな会場でも隅々まで届く、時に大きすぎる声。
　そういう堂々たる高座姿で演じる落語が気持ち良い。相撲取りは愛嬌が溢れ、若侍に気概があり、商家の主に苦労人の優しさがある。
　所属する落語芸術協会では、早くから「本格古典の成長株」と注目されて、文化庁芸術祭大賞にも輝いた。
　当然のように寄席の出番が増えた。早い時間には短い滑稽噺で客席を温め、トリで次々と長講に挑戦した。ところが、サラロ（興行の最初の出番）でも、トリでもない、間の出番をもらって、遊馬はハタと困った。
「俺には15〜20分で演じるネタがない！」
　短い滑稽噺とトリの大ネタばかりの「両極端だった（本人談）」ことに、今更ながら気がついたのだ。
「師匠の小遊三に『遊馬の落語は長ェからなあ』と言われて喜んでいたけど、それじゃ欠陥噺家ですよ。さて、浅くも深くもない出番で何ができるかと、初めて真剣に考えました」
　15分のネタがないなら、そういう尺（口演時間）のネタを覚えればいい。だが、自分が好きなネタをどんな出番でもできるように作り直す道を選んだ。
　「トリでやるネタですけど『味噌蔵』が好きなんです。ケチな旦那の留守に、奉公人たちが大宴会を催して日頃の鬱憤を晴らすのが愉快だし、昔の商家の雰囲気もよく出てる。これを何とか短くできないかと」
　まず主人公のケチな旦那を〝改造〟した。「カミさんを持つのは無駄だ」と女性蔑視のような発言をするのがどうにも嫌だというので、本編から女房の役を削ってしまった。カミさんがいないのだから、子供も生まれない。さらにケチの逸話も皆が共感できないものは外した。おかげで後半がずいぶん

スッキリした。

「もちろん短くすればいいというわけじゃない。噺の眼目である奉公人の宴会はたっぷり賑やかにやります。旦那が今夜泊まりになるかもと聞いた番頭の目がきらりと光り、『お泊まりですね？』という、この呼吸が好きなんですよ」

噺の雰囲気を変えずに刈り込んで、「味噌蔵」本編は15分前後にまとまったという。

「持ち時間は20分だけど、私の場合、改造以前のネタが体に入っている分、やってるうちに少し長くなるんです。だから、とりあえずは15分にしておいて、本番で20分にまとめます」

短くてもトリの出番と変わらぬという遊馬流の「味噌蔵」。お手並み拝見である。（長井好弘）